
翼

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼

【Nコード】

N3410F

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

毎日が楽しい。だからこそいつか来る別れが怖い。いつそ逃げ出せたら…そんな哀の前に現れたのは？？

0 デアイ

飛びたい。

翼が欲しい。

真っ白な翼で飛び立つの…

あまりにも幸せすぎて

いつか来る別れが怖くて

それならいつそ今逃げてしまいたい。

「どうしてそんな顔をしてるんですか??」

「あら…珍しいお客様ね。」

「私は前からあなたを見ていましたよ。」

「全然気づかなかったわ。」

「まあ、私の片思いですから。」

彼はポンツと真っ赤な薔薇を出し、

私にそっと差し出す。

「愛の告白かしら。」

「そういうことにしておいて下さい。」

「あら、嬉しいわ。」

私がクスッと笑うと

彼は歯をニカッと出して

「笑顔良いな。」

っていつもと違う口調でそう言った。

「…え。」

その時の彼は

世紀末の魔術師では無く

好きだった彼に思えた。

声も口調もそっくりで

頬が熱くなつた。

「あなたの名前は？？」

「怪盗キッドです。」

「本名は？？」

彼はモノクロを外して

私の瞳を見つめる。

「黒羽快斗です、お見知りおきを。」

大好きだった彼と

瓜二つな彼に

私の心臓は鳴り止まなかった。

0 デアイ（後書き）

連載開始です

テスト前なので1話は後です↑

ゴメンなさいすいません><

哀×快斗好きなんです^^*

これだけは正統派じゃないですね↑

とりあえず今度こそちゃんと

頑張りますo(・、ω、・)キュ!

応援よろしく願いします♪

1 キオク

黒の組織が消滅して二週間が経った。

江戸川君とFBI、更に服部君や怪盗キッドの協力もあり

私達は勝利することができた。

ただ、代償は大きかった。

それは…

ピンポーン

「誰かしら。」

私は小走りで玄関に行き、ゆっくりドアを開けた。

「哀ちゃん。」

「蘭さん。」

「明日、青子さんのお葬式だから…それを伝えに来たの。」

「博士から聞いたわ。」

蘭さんは今にも泣き出しそうで

そんな彼女を見ていられなかった。

そう、代償とは

中森青子の命だった。

「そっか、じゃあ明日新一の家に待ち合わせね。」

「ええ、わざわざありがとつ。」

「うん。」

「じゃあ…」

「哀ちゃんっ!!」

「何かしら??」

蘭さんはニッコリ笑って

「自分を責めたりしちゃダメだからね。」

「え…」

「実は新一からの伝言なんだ。」

工藤君…

私のこと心配してくれて…

馬鹿ね。

「ありがとう、私は大丈夫だから。」

「良かった♪じゃあね。」

「ええ。」

私は蘭さんに手を振り、ドアをゆっくり閉めた。

「…ふう。」

青子さんは、怪盗キッド…快斗の幼なじみで

蘭さんそっくりな優しくて可愛い人だった。

快斗がジンに拳銃を向けられた時、彼女は…

実は私も良く覚えていない。

多分、頭の奥に閉まってしまったんだと思う。
思い出そうとすると真っ白になる。

ピンポン

「また？」

今度は誰？

哀はダルそうに玄関まで足を運んだ。

「よっ！ー！」

「…快斗??？」

「ピンポンピンポン　良く分かったな」

快斗は時々私の家に遊びに来る。

おそらく私が落ち込んでいないか
気にかけてくれているんだと思う。

辛い気持ちを押し殺して…

「あれー博士は？」

「博士なら出掛けたわ。」

「じゃあ1人だったのか。」

「ええ。」

快斗は私の頭をくしゃくしゃ撫でて、

ニツコリ笑った。

「寂しかったら俺を呼べよな。」

「快斗…」

快斗が怪盗キッドだと知っているのは

私と青子さんだけ。

もしかしたら工藤君も知っているかもしれない。

これはあくまで私の推測だけだね。

「俺は哀がいるから寂しくねえぞ。」

「え？」

「お前が今の俺の支えになってるんだ。」

快斗はいつも嬉しい言葉をくれる。

けど、本当は気になるの。

青子さんのこと、どう思っていたのか。

「か、快斗。」

「ん？」

「あのね・・・青」

― 快斗

え？

― 青子、ずっとずっと

何なのこれ…

声が頭の中で響き渡る。

―快斗のこと…好きだったんだよ。

青子さん。

けどどうして彼女が…

―俺も、青子のこと…

快斗？

どうして？

―好きだ…青子、愛してる。

これ…あの時の

止めて、止めて、止めて

「哀？」

思い出したくない。

お願いだから止めて…

「いやあああああああああ！……！！！」

1 キオク（後書き）

訳分かんない展開で
申し訳無いです><

とにかくテーマは

悲しみを乗り越えた先には・・・！！

まあとにかく頑張りますよ（p・v、q）

あー文章めちやくちやだよ。

自分でも理解できな（rk

評価ありがとうです^^*

頑張りますo（・、ω、・）キュ！

2 オモイ

そう、

2人は愛し合っていた。

それを壊したのは私。

黒の組織の奴らに追われて、

転んだ私を助けたのは快斗。

そんなスキだらけの快斗に拳銃を向けたのはジン。

そんな快斗を庇^{カバ}って撃たれたのが青子さん。

そう、

青子さんが撃たれたのは私のせい。

私が死ぬべきだったんだわ。

…ねえ、工藤君。

あなたは自分の運命から逃げるなって

私にそう言ったわよね？

けどね、工藤君。

私、今とても逃げてしまいたい。

いつそ空を飛んでどこかに行ってしまいたい。

そんなことを思っていたら

目の前が真っ暗になった。

ここはどこ？

周りが見えない。

どこにいるの？

「哀！！！」

パチッ

目を開けた瞬間ギュッと抱きしめられた。

「良かった…」

ああ、快斗だ。

工藤君じゃ無いよね。

快斗なんだよね。

「…ゴメンなさい、心配かけて。」

「どうした？魔ウチされてたけど。」

全部思い出してしまった。

本当は私のこと憎くてしょうがないんじゃないの？

ねえ、快斗。

偽りの優しさなんて私欲しくないわ。

「青子さん。」

「え？」

「青子さんのこと愛してた？」

「…ああ。」

ズキン

胸が痛む。

私、取り返しのつかないことをしてしまったのね。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい快斗。」

「哀？」

「私、私のせいで…」

涙が止まらなかった。

どうやって償えば良いか分からなくて

困り果てた快斗の顔を見れなかった。

けど、快斗は私を優しく抱きしめてくれた。

「哀、青子のこととはすごく悲しいし…辛かったし、正直今でも泣きそうになるんだ。」

「うん。」

「けど、前に進まなくちゃ青子だって喜ばないだろう？」

「快斗…」

「だから、俺は幸せを自分の手で掴んでみせる。青子の分も強く生きるんだ。」

快斗の言葉で更に涙が零れる。

どうしてそんなに強いのか？

「哀もくよくよすんな!!」

馬鹿。

「お前だって、家族の分を精一杯生きなきゃいけないんだ。」

何にも分かって無いわ。

私はあなたみたいに強くなれない。

「無理よ。」

「え？」

「快斗は何にも分かって無いわ。」

「何を言っ…」

「あの人はもう遠いの。」

私は工藤君がいれば

何だってできる気がしていたのに

工藤君はもう私の横にはいない。

大切な彼女の元へ戻ったの。

分かっていた。

分かっていたのに認めたく無いの。

「哀…まさか、新一のこと。」

「ええ、そうよ。」

口にするのが怖かったけど

今なら言える気がする。

「私は工藤君が大好きだったの…」

2 オモイ（後書き）

やっぱ奈津美の王道は

哀ちゃんが新一への片思いです。

快斗大好きです（*O u* p）

マジかつこよすかつこよす& a m p ; # 9 8 2 5 ;

ごちゃごちゃだしこの後何にも

考えていないです…はい。

けど哀ちゃんには立ち直ってもらいますをっ

3 ナミダ

好き。

好きで好きで大好きで

しょうがなくて

けど、その人には別に大好きな人がいて

諦めるしか無かった。

私は彼に幸せになって欲しかったから。

「哀…」

快斗は悲しい瞳で私を見つめて

ギュウっと私を抱きしめた。

「俺たち、同じだな。」

「…え？」

「好きな人、遠いな。」

「快斗…」

「あんなカッコつけたこと言っただけ、本当はすげー寂しい。」

日常から消えた愛しい存在。

いなくなってから気づく大切さ。

「哀、泣いても良いか？」

「ええ、もちろん。」

快斗はフツと微笑み

ゆっくり瞳を閉じる。

スーッと流れる一筋の涙は

寂しく輝いていた。

「…」

これからどうやって生きていけば良いの？

吉田さんや円谷君に小嶋君。

博士もいる。

今までの生活を考えれば、幸せすぎる。

けど、彼がいなくなったただけで

大きな穴が開いてしまった。

逃げたい、逃げたい、逃げたい。

目標も夢も無い。

何に向かって進めば良いの？

「しみりしちゃったな！！外いかない？」

「外？」

「良い場所あるから教えてやるよ」

「分かった、行きましょう。」

「おっと。」

快斗はソファーの上に置いてある
自分の真っ白なマフラーを

私の首に優しく巻く。

「風邪引かれたら困るからさ。」

「けど、快斗が…」

「大丈夫だよ、俺秋好きだから。」

好きとかそういう問題じゃ無いと思うけど…

哀は無邪気にクスクス笑った。

「じゃあ行くか!」

「…うんっ!」

哀はいつもより子供っぽく

快斗の隣を歩いた。

ギュッと繋がれた手が温かい。

「綺麗。」

並木道を歩く2人の周りの木々は

赤や黄色や橙に染まっていた。

落ち葉を踏んだ時のサクサク感が

私的にたまらない。

「あのさ、落ち葉踏んだ時サクサクいうじゃん？俺すんげー好きなんだよね。」

「同じ。」

「え？」

「私も同じこと考えてた。」

そんなことですら嬉しくて

とても心地よい。

「もうすぐだから。」

「楽しみ…」

「哀、目閉じて。」

私はゆっくりと目を閉じた瞬間

フワッと体が宙に浮いた。

「え!？」

「こっちの方が早いし、哀も楽だろ？」

多分、私は快斗におんぶされてる。

背中がとても温かくて居心地が良い。

けど、快斗の背中が大きくて

私と快斗の差はこんなにあるのかと

実感してしまった。

あくまで私は小1の灰原哀。

快斗から見たら私は手のかかる子供。

どうしてこんなにショックなのか分からない。

快斗の背中には温かいのに

秋風が冷たくて、寒くて

泣きそうになった。

3 ナミダ（後書き）

訳分かりません＞＜↑

とにかく秋なんです秋↑

ほのぼのなシリアス目指してますし

恋愛物ですよ一応！兄弟愛とかでは無いです！

哀ちゃんが一瞬小1に…

うんっ！！

これは哀ちゃんが嬉しすぎてそれで…

だーッ！！！！↑

本当はずっと口調を子供にしたかったけど

書いてて気持ち悪かったので

書きませんでしたっ（＊・U、艸

次話も頑張ります（＊・ω・）（＊・ω・）ウン

4 コクハク

「着いたぞ、哀!!」

「目、開けて良い？」

「良いよ。」

目を開けた瞬間

フワッと風が通り過ぎる。

「綺麗…」

町が見下ろせる。

こんなに高い所に来たんだ…

「快斗、重いでしょ？降ろして良いよ。」

「軽い軽い!!」

快斗は歯を出して笑う。

本当に笑顔が素敵だな。

見てるこっちも笑顔になれる。

「降りたいの。」

「分かった。」

快斗はゆっくりしやがみ

私は快斗の背中から離れる。

「本当にすごいわね、此处^{ココ}。」

「ここは、青子と良く来たんだ。」

「青子さんと?」

「ああ。青子は空飛んでる気分とかはしゃいだりしてたな。」

「空を飛んでる…」

空。

大きくて広くて

終わりが無い。

そんな空を飛べたら

どれだけ幸せなんだろうか。

どれだけ気持ち良いのだろうか。

「空、飛びたい。」

「…哀？」

「空を飛んで、此処ココから逃げてしまいたい。」

「そんなこと言っなよ。」

分かってる。

分かってるのに

どうして私はこんなに駄目なんだろう。

どうして私はこんなに弱いんだろう。

「哀が今までどれだけ辛かったのか俺には分からない。」

「え？」

「今の幸せは哀から逃げたりしないと思うんだ。」

「快斗……」

「哀はまだ幸せに慣れて無いんじゃないかな。」

「……。」

「ご、ごめん！言い方が悪かった……えっとその……」

「そうかもね。」

幸せに慣れて無い、か。

そうかもしれないわね。

幸せを受け入れられなくて

どこか冷たくて

みんな大切に、愛しいのに

素直になれなくて、ツンツンしてるって

言われてもしようがないって思った。

「ありがとう、快斗。」

「今のお前、良い顔してるよ。」

「本当??」

「ああ、すっげえ可愛い。」

トクン…

心地よい鼓動。

「あら、褒めたって何にもあげないわよ?」

「別に…そんなつもりじゃ。」

「冗談、何か欲しい物でもあった?」

「んー」

快斗は空を見上げて

今にも泣き出しそうな顔で

口を小さく動かす。

『あ お こ』

無意識に口が動いたのだと思う。

しまったって顔を手で覆い

私にゴメンと呟いた。

「哀は…新一のこと。」

「好きよ。」

即答。

意外と素直だと自分でも思う。

この気持ちは変わらない。

蘭さんがいるって分かってる。

それでも彼が大好きなの。

「新一は良い奴だもんな。」

快斗はまた空を見上げながら

「俺もあいつみたいに優しい奴になりてえな。」

「十分優しいじゃない。」

「そうか?？」

「ええ。」

あなたの優しさは痛いくらい

ヒシヒシと伝わってくる。

「俺、哀を好きになっても良いか?？」

「え…」

「ダメ…かな?？」

快斗は頬を赤らめて

ポリポリを頭をかいた。

「もちろん良いに決まってるでしょ。」

「光栄です、お姫様。」

快斗は私の手をとって小さくキスをする。

手の甲がとても熱い。

「私にはもつたいたない言葉だわ。」

「そうか??」

「ええ、私お姫様って柄じゃ無いし。」

「んー女王様って感じ!!てか魔女だな魔女!!」

「…さっきの言葉取り消そうかしら。」

「わー冗談です冗談!! ジャパニーズジョークだよ」

「はいはい。」

本当は嬉しくて嬉しくて

しょうがなかったけど、

素直に喜べなかった。

私は元の姿に戻るべきなのだろうか…
元の姿に戻って、ちゃんと罪を償って
新たなスタートを切るべきなのだろうか…

冷たい風が手の甲を冷やした。

4 コクハク（後書き）

哀はまだ新一に未練があり
けど快斗のことも気になってて
快斗はまだ青子に未練があり
けど哀のことを好きになりかけてて

って感じですね。 (・、ω、・) キュ！
整理しにくくてスイマセン

そして皆様お久しぶりです><
バイトや学校やらテストやら
色々アタフタしてたら全然ここに
来れませんでした…；；

これからもマイペースにだらだら
更新していきたいです。

よろしく願いします*

ゆっくりドアを開けた。

「よっ、新一ー!!」

「快斗じゃねーか、どうしたんだ??」

「ちょっと…話したいことがあって。」

俺は快斗を部屋に招き入れた。

「何かあったのか??」

俺は快斗に温かいココアを出した。

快斗はサンキューと言ってゆっくりココアを口にする。

「俺、哀のこと好きになりかけてる。」

「え…??」

「友達とか家族とかそーいう感情じゃ無いんだ。」

「良いんじゃないの??」

俺は、快斗がいつまでも青子ちゃんのことを

引きずっていて欲しく無かったから、

その事実には正直嬉しかった。

「軽々しく言ってるじゃねーよ。」

「え?？」

「哀はお前が好きなんだぞ!?!お前だって気づいてんだろ?？」

好き??

あいつが俺のことを??

「お前が…元に戻ったら蘭ちゃんの所に行く、哀は辛い気持ちを押し殺して薬を作ったんだよ!!罪滅ぼしとかじゃねえ!!お前の幸せのために必死に研究したんだよ!!」

「志保が…俺を??」

「お前、気づいてたんだろ。」

快斗の言葉に体がビクッと反応する。

「ああ。」

「…そっか。」

「分かってたけど、どうして良いか分からなかった。」

「哀から告白とかされたのか?？」

「俺が元に戻った時、泣かれた。」

本当は何か言いたかったんだと思う。

けど、俺が嬉しくてはしゃいで…

あいつの言葉を遮ったんだ。

最低だ、俺。

「俺が哀を幸せにする。だから…お前にはけじめをつけて欲しい。」

「けじめ??」

「哀をどう思ってるかちゃんと言って欲しい。」

志保をどう思ってるか。

俺にとっての志保の存在。

そう考えると難しいな。

いきなり俺の前に現れて、最初はツンツンして嫌な奴だっ

思ってたけど、本当は良い奴で

誰よりも家族思いで、優しくて

俺はそんな志保が

好き。

「俺、志保が好きだ。」

「は！？」

「いや、何て言えば良いんだろ……」

蘭に対する気持ちとは違う。

言葉に表しにくいこの気持ち。

「そっかそっか、お前もガキだなあ〜新一！！」

「ガ、ガキ！？」

「まあ、頑張れたまえホームズ君♪」

そう言って快斗は帰ってしまった。

笑顔を残して。

「そーゆうことが。」

新一は冷めたココアを飲んで

くすりと笑った。

「あいつらしいな。」

5 ソンザイ（後書き）

お久しぶりです

奈津美ですよう（^^）

正直この文章訳分かんないですww

もう上手く書けないです…

いや、元々下手だったんですけど。

まあとにかくしっかり書きたいです。

哀と新一をスッキリさせーの
快斗と哀をラブラブさせーの

え？それだけ？

…あ、歩美でも出そうかな↑

ノープランでゴメンなさーい><

評価・感想待ってます^^*

中傷は受け付けられないです…

メンタル弱いんで（笑

6 エガオ

青子さんが亡くなって一ヶ月。

私は以前の様に逃げ出したい、
と思うことも無くなっていた。

快斗という存在のお蔭で…

「ケホケホ…」

「博士、大丈夫??」

今朝、突然博士が倒れた。

原因は研究で寝不足続きで

まともに食事も取らない日々。

お医者さんが言うには

疲労からくる風邪、とのこと。

「すまんのぉ、哀君。」

「いいのよ博士、気にしないで。」

今日は土曜日。

学校が無いから博士の看病ができる。

私は博士におかゆを作ってあげようと

キッチンへ向かった。

「ふう…」

私は未だに悩んでいた。

元の姿に戻るか戻らないか…

もし、今戻ってしまったら

快斗との関係は崩れてしまわないか

それが怖くて一歩踏み出せないでいた…

・・*・*・*・*・*・*・*・*

「寒いな…。」

俺は志保へ自分の気持ちを

しっかり伝えようと決めた。

本当は快斗に言われた次の日にも

伝えようと思ったが、

少し時間が経ってからの方が、

志保にとっても俺にとっても

良いんじゃないか、と判断したのだ。

快斗のお蔭で以前より明るくなったしな…

俺は少し震えた手でインターホンを押す。

ピンポン

ドキドキと高鳴る心臓。

やべえ…こんな緊張するの

いつ振りだろう？

ガチャ

「く、工藤君!」

「よお、志保。ちょっと話があるんだけど良いか?」

「今、博士が風邪ひいてて…」

「大丈夫なのか?」

「ええ、今はぐっすり眠ってるわ。」

いざ志保の前になると

更に緊張する。

どうやって話を切り出そうか…

「ごめんなさい工藤君、今度でも大丈夫かしら?」

哀は申し訳無さそうな顔でそう言った。

「あ、ああ分かった。」

「じゃあ、また…」

「じゃあな！風邪ひくなよ！」

哀は明るい顔で微笑み

ドアをゆっくり閉めた。

「はあ…」

言えなかった…

しょうがないよな、博士が

風邪ひいちまったんだから。

「しーんいち」

「か、快斗！？」

「何だ何だ、やっと哀に言ったのか？？」

「言えなかった。」

新一はムスツとした表情を見せる。

道端に転がる石ころを勢い良く蹴飛ばす。

「そりゃそうだ、哀はこれから俺とデートだからな！」

「え！？それで志保の奴断ったのか…ふーん。」

「何だよ！理由がそれじゃ不満かよ！」

だからあんなに明るいい顔して笑ってたのか、と

新一は快斗に優しい笑顔を見せて

「快斗、志保のことよろしくな。」

「突然何だよ…気持ち悪い笑顔見せやがって。」

「気持ち悪いだと！？良い笑顔じゃねーか…！」

ガチャ

「快斗、お待たせ…あ。」

真っ白いポンチョに

可愛い茶色のスカート。

いつもよりお洒落をした

哀が笑顔で家から出てきた。

「工藤君…あ、あの…博士が風邪なのは本当なの。」

「良いよ、また今度な。」

新一は二人の邪魔をしてはいけない、と
すぐにその場を去った。

「ねえ、快斗。」

「何??」

「工藤君と何話してたの??」

「ひーみつ 男同士の話」

快斗は哀の冷たい手をそつと握った。

「買い物とかで良いか？？哀に可愛い服選んでやるよー！」

「ありがとう。」

冷たい風が吹き抜ける。

もうすぐ冬。

一番寒くて、一番寂しい季節。

6 エガオ（後書き）

お久しぶりです。

無償に書きたくなつて

舞い戻ってしまいました。

新一からのお話はお預け。

小休止的なお話でしたね！

ちよくちよく書きます^^

ひどすぎてごめんなさい。

7 イモウト

哀と快斗は大きなデパートまで

足を運んだ。

「哀、なんか欲しい物あったら言えよ??」

「いいわよ、そんな…悪いし。」

「気にすんなって…昨日お小遣い貰ったからさ」

デパートは人で溢れ返っていた。

早くもクリスマスグッズのコーナーが

あり、冬の訪れを実感できた。

「あれ…快斗じゃん!」

「おう!」

可愛い女子高生が後ろから

いきなり声をかけてきた。

「あれ、快斗妹いたの??? ちょく可愛いじゃん!」

妹。

その単語に哀は心を痛めた…

「違うよ、今デート中だからまたな」

快斗は哀に二カつと歯を出して笑い

女子高生から逃げるように軽く走った。

「ゴメンな、あいつ…めんどくさくてさ。」

「いいえ、大丈夫よ。気にしないで。」

妹。

高2と小1。

やっぱりちょっと悲しくて

快斗の顔見れなかった。

「哀、この服絶対哀に似合うぜ」

逃げ込んだ先は子供服屋。

快斗は哀に可愛い小花柄の

ワンピースを当ててみる。

「うん、可愛い！」

「こんな明るいピンクのワンピース…」

「哀は可愛いから似合うよ」

快斗は満面の笑みを浮かべて

他の服も見えていく。

「快斗、本当に買ってくれるの??」

「もちろん、どれが良い??」

「…ピンクのワンピース。」

「気に入ってくれたんだ♪ちょっと待ってて。」

哀が着ないような

ピンクの花柄ワンピース。

快斗が選んでくれた服。

哀は無邪気に笑った。

「お待たせ!」

「うん、ありがとう。」

「あ…あのさ、俺ちよつと花屋寄っても良い??」

「ええ、良いわよ。」

哀はもしかしたらまた薔薇の花束でも

買ってくれるのかしらとクスリと笑う。

花屋に着き、快斗はすぐに花束を手にとる。

「今日は、青子の誕生日なんだ。あいつの墓行かなきゃ。」

何を自惚れていたんだ。

「ごめんな哀、お前も来るか。」

何が薔薇の花束よ。

「良いわ、一人で帰るから。」

快斗にとって私は

「哀……」

『妹』でしかないのよ。

「じゃあね。」

分かってたのに、

「哀……」

何でこんなに胸が苦しいの???

右手が冷たい。

快斗が握ってないから。

さっきより寒い。

快斗が隣にいないから…

7 イモウト（後書き）

展開が急すぎますね……
ごめんなさい。

いやあちよつと季節を先取り
十一月くらいのお話になって
ますが気にせず読んで下さい^^

8 ゲンカイ

「青子、久しぶり。」

俺は哀を追いかけるか悩んだ。

「遅くなってゴメンな。」

けど、青子と約束したから

俺はお墓へ向かった。

何度も何度も頭に哀の悲しい顔が

浮かび、消えて、浮かび、消えて

そんな繰り返し。

「青子、お誕生日本当におめでとう。」

俺は二カつと歯を出して笑う。

空はもう綺麗な橙色、

周りにはもう誰もいなかった。

「青子、ゴメンな。」

守ってあげなくてゴメンな。

一番にお誕生日祝うって約束…

「もう、いっぱい来たんだな。」

青子のお墓にはたくさんのお花と

たくさんプレゼントでいっぱいだった。

「あのな…俺、ずっとずっと青子が好きだ。」

俺は青子に全て伝えようと

言葉を続けた。

「これからも青子以上に愛せる人なんて、
一生現れないと思うし、今でも青子が好きで好きで…

けど、今気になる人がいるんだ。好きになりかけてるんだ。」

…なりかけてる??

自分から出てきた言葉に

俺はびっくりした。

「なりかけてる…じゃねえか。」

快斗は顔を上げて、口をゆっくり開けた。

「灰原哀が、好きなんだ…」

そう言った瞬間、強い風が吹いた。

「青子、俺…幸せになって良いのかな??」

愛する人を守れなかった

そんな弱い俺が本当に

幸せになって良いのだろうか…

「青子… 答えるよ。」

哀と毎日一緒にいた。

毎日が充実してて幸せで

けど、哀と分かれて一人で

家まで歩いてると寂しくて

寂しくてたまらなくて

いるはずも無いのに

右ばかり見て、俯いて、見て

青子を探してたんだ。

「青子、青子、青子…」

今まで押し殺してた感情が

止まらなくなる。

ずっとずっと我慢してた。

青子が死んだ時必死に耐えた。

母さんや新一や哀に心配かけたく無くて

青子が死んでから俺は泣かない様に

必死に耐えて来たんだ。

哀の前で一回泣いちゃったけど

それから一回も泣いて無かったし

それまで一回も泣いたりしなかったし

いや、泣くのが怖かったんだ。

「くそ…何で、何で、何で死んじゃったんだ!!」

俺は声をあげて泣いてた。

こんなにも青子が好きだったなんて

こんなにも青子の存在は俺の中で

大きかったなんて…

気づくのが遅すぎたんだ。

俺は、青子の死と向き合おうと

してこなかったんだ。

俺が哀に言った言葉は全部綺麗事で

「っ…青子、ゴメン、青子…」

青子とまた一緒に学校に行きたい。

青子とまた一緒に帰りたい。

青子とまた一緒に…一緒に…

「うわああああ!!!!!!」

もう抑えられなくて

俺はひたすら泣いてた。

「…快斗。」

哀が見てるなんて知らないで

俺はひたすら泣き続けた。

風が冷たくて冷たくて震えながら

ひたすら泣き続けた。

8 ゲンカイ（後書き）

快斗は哀を元気づけるのに
必死で自分の気持ちを
押し殺してたんです、

さて物語も段々と終わりに
近づいてきましたよー！！

9 カスミソウ

「さすがにきつかったかしら…」

青子さんへの花束を持つ快斗の顔、

私が逃げ出した時の顔は同じくらい

悲しくて、今にでも泣き出して

しまいそうだった…

「私も行かなきゃ…」

青子さんの死。

私に向き合わないでどうするの??

快斗は私の何倍も苦しんだのに…

「いらっしやいませー!!」

私は青子さんのお墓の近くにある

小さなお花屋さんに入った。

『青子のかすみ草が好きだったんだ。』

以前快斗が言ってた言葉が頭をよぎる。

確か…一週間前だったかしら。

・・*・*・*・*・*・*

「ただいまー！」

「お帰りなさい、博士。」

「おお快斗君、いつもすまんのぉ。」

「いえいえそんな…」

快斗は博士の持つ花束を見つめる。

「お、この花はかすみ草と云ってのぉー小さいけど可愛いじゃろ？
」

「ええ、素敵な花ね。あそこの花瓶に飾りましょう。」

快斗は切ない顔でかすみ草を見つめていた。

「青子が…」

「え？？」

「青子が好きだったんだ、かすみ草。」

「そうなの…」

・・*・*・*・*・*・*

「かすみ草下さい。」

「かすみ草だけでよろしいですか？？」

「ええ。」

かすみ草は花束に少しだけ入ってたりする

白くて小さい可愛い花で、

他の花の引き立て役。

「ありがとうございました!!」

私はかすみ草の花束を大事に抱えた。

青子さんが好きな理由分かる気がする…

私は暗くなる空を見て、足を速めた。

・・*・*・*・*・*

「青子…青子!!!!!!」

青子さんのお墓の方から

泣き叫ぶ声が聞こえた。

もしかして…

哀は必死に走った。

もしかして、もしかして、もしかして

「か、快斗。」

初めて見た。

あんなに感情的な快斗

初めて見た。

近づこうとも思った。

けど、近づけなかった。

「分かってたじゃない。」

快斗は今でも青子さんのことが

こんなにも好きなんじゃない。

ずっと我慢してたんだ。

こんな状態の快斗見ていられなくて

私はその場から逃げ出した。

「はあ…はあ…」

息を切らしながら走った。

快斗は、ずっと我慢してたんだ。

本当はずっと苦しかったんだ。

それを隠して私を励ましてくれてたんだ。

苦しめてたのは私なんだ。

「志保!!」

志保…

快斗じゃない。

こう呼ぶのは快斗じゃない。

私はゆっくり振り返る。

「工藤君…」

「志保、どうしたんだ…??」

工藤君を見た瞬間、

涙が止まらなくなった。

「工藤君!!」

私は工藤君にすがりついて

子供の様にえんえん泣いた。

「志保：今なら時間あるか??」

「え、ええ。」

「家来いよ、話聞かせて欲しい。
：俺も話したいことがあるんだ。」

9 カスミソウ（後書き）

さてさてスピード更新
しちゃいましたー！！

相変わらず急な展開ですねえ……

頑張って今月中には完結
させようと思います^^*

10 ケツイ

快斗、ゴメンなさい。

たくさん苦しめて

本当にゴメンなさい…

けど、私決めた。

快斗を見て、決心がついたの。

「工藤君、私…薬飲もうと思うの。」

「え…」

工藤君は目を丸くした。

今までは逃げ出すための翼が欲しい。

そんな考えだったけど、今は違う。

逃げ出すための翼じゃなく

新たな場所からまた始めるための

翼が欲しいと思ったから、

だから、宮野志保として

しっかり罪を償って生きていこうと、

新たな場所を探すために元の姿に戻ろうと、

私はさっきの快斗を見て決心した。

「ねえ、工藤君…私ね、一人で頑張ってみたいの。」

「志保…」

「あなたやこの灰原哀としての生活が嫌になったんじゃない。むしろ、幸せでいっぱいでも本当に楽しかった。」

「けどね、私は灰原哀じゃないの、宮野志保なの…」

「宮野志保として新たなスタートを切りたいの。ダメかしら??」

「急すぎないか??」

「本当はずっと考えてたの、青子さんが死んでから快斗はいつも傍にいてくれて、たくさん甘えたわ。けど、私も誰かを支えてあげられるようなそんな存在になりたいって思ってたわ。」

「博士の家から出て、新たなスタートを切るの。」

「志保…」

「だから、最後にちゃんと伝えなきゃ。」

大丈夫。

後悔なんてしない。

快斗からたくさん元気を

分けてもらったじゃない。

快斗からたくさん勇気を

分けてもらったじゃない。

「あなたが好きよ、工藤君。」

「志保…」

「あなたが蘭さんが好きなのは分かってる。
けど、私はあなたが好きになっちゃった。
後悔なんてしてない。むしろ感謝してる。
あなたのお蔭で私は…私は…ここまで…」

涙が零れた。

快斗といった時は

心の奥にしまいこんでいた感情。

「志保、俺は蘭が好きだ。」

ズキン…

分かっている

面と向かって言われると心が痛む。

「けど、お前は俺にとって大切な存在なんだ。」

「工藤君…」

「だから、いなくなつて欲しくない。」

「ありがとう、工藤君。」

「その…なんていうか親友じゃなくて…相棒??」

「あ、相棒!??」

「いや、違うな…えつとなんて言えば良いんだろ。」

あたふたする工藤君が

なんだか可愛く見えて

…愛おしい。

「もう家族みたいなものってことで良いかしら?」

「え??」

「工藤君は私にとって大切な人。

それはずっと変わらないと思うの。

工藤君は違うかもしれないけど…」

「違うない。」

工藤君は私の頭を撫でながら

「ありがとな、志保。」

優しい笑顔にドキッとする。

「お前、顔赤えぞ。」

「う、うるさいわね!」

「…快斗はどうする??」

「とりあえず転校って事にして
小学校を辞めなきゃね…」

博士にもしつかり伝えて、
快斗にも会うから…心配しないで。」

「分かった…なあ、志保。」

「何かしら?？」

「お前は、快斗のことどう思ってる?？」

快斗のこと…

一言じゃ上手く伝えられない。

「工藤君、それは…宿題ってことで良いかしら?？」

「ああ、構わないぜ?？」

「じゃあ…帰るわね。」

工藤君。

本当にありがとう。

「志保!!」

あなたには本当に感謝してる。

「俺のこと…好きになってくれてありがとな!」

「…馬鹿。」

「志保、幸せになれよな!」

「ありがとう。」

私はゆっくりドアを開け

工藤君の家を後にした。

「っ…」

私は工藤君の家を出てから

何分くらい外にいたのかしら。

「っ…っ…」

声を押し殺して泣き続けた。

あなたを好きになれて

本当に良かった…

10 ケツイ（後書き）

前向き哀ちゃん！

はい、こんにちは。

前向き哀ちゃん書いてて
楽しすぎましたね^^

一つ一つの言葉に

想いをこめましたよー！！

テンション高くてすみません
↑

11 サヨナラ

「今まで、本当にお世話になりました。」

博士にしっかりと自分の想いを伝えた。

そしたら博士は笑って背中を押してくれた。

『またいつでも会えるじゃろ?』

っていつもみたいに優しく笑ってくれた。

博士、いつもいつも傍で支えてくれて

本当にありがとう。

「みんなのこと、絶対忘れません。」

新しい家を見つけ、荷物もまとめ終わった。

工藤君への告白から二週間。

そして、今日転校という形で

この帝丹小学校に別れを告げた。

クラスのみんなが寂しそうな顔で

私を見つめる。

本当に楽しかった…

「哀ちゃん…ッ…寂しいよ!!」

「急すぎるぜ灰原!!」

「そ、そうですよ!!僕たちに相談無しで…」

吉田さん、小嶋君、円谷君が

目に涙を溜めて私へ駆け寄る帰り道。

「ゴメンなさい…」

上手い言葉が見つからず

私は謝ることしかできなかった。

「もう会えないの?」

吉田さんの言葉が胸に刺さる。

私はもう、灰原哀じゃなくなる。

宮野志保に戻るんだ…

「分からない、けどね私にとってあなた達は
ずっと大切なお友達だから。忘れたりしないわ。」

こんな私に優しくしてくれて

こんな私と仲良くしてくれて

「今まで本当にありがとう…さようなら。」

私は涙を目に溜めて

けど零れないよう笑顔で

彼らとお別れをした。

・・*・*・*・*・*

一人で通学路を歩く。

もう、みんなで歩く事は無い。

寂しくて、寂しくて

私は歩くことを止めなかった。

辺りはすっかり暗くなり

私以外歩いてる人なんていない。

博士…心配してるかしら。

「あ、哀…！」

後ろからいきなり名前を呼ばれ

びくつと肩に力が入る。

「か、快斗…！」

「ずっと…探してたんだ。」

快斗にお別れしなきゃ。

そう思い口を開けるが

思っように声が出ない。

「…っ、快斗。」

「どうした？」

「私、博士の家から出て行くことにしたわ。」

「え！？どこ行くだよ！！」

足が震える。

快斗の眉間に皺が寄り

切ない顔で私を見つめる。

「私、決めたから…」

上手く言葉にできず、

私は走って快斗から逃げた。

「ま、待てよ！！」

「来ないで！！私、見たんだから！！」

「何をだよ！！」

快斗に捕まりそうになり

私は声を荒げて言った。

「快斗が青子さんのお墓で泣いてるのをよ！！」

ピタッ

快斗の足が止まった。

「私がずっと快斗を苦しめてた、だから……！！」

涙が零れる。

視界が涙で歪む。

私は立ち尽くす快斗を置いて

必死に走って逃げた。

快斗を傷つけた。

けどこれで良いんだ。

これで快斗を傷つけるのは最後。

「はぁ…はぁ…」

今日はピンクのワンピース。

快斗が買ってくれたもの。

着るのは最初で最後。

「さようなら、快斗…」

私は工藤君の家へ向かった。

『宿題』を提出するために…

11 サヨナラ（後書き）

またまた急だし
更新に時間かかって
本当にすいません！

描写が少ないし…
後で編集して加えられたら
加えてみようかと思ってます。

哀ちゃんは快斗に捕まったら
元に戻る決意が薄れてしまう。
という思いから逃げたんですね。

はい、次話も頑張ります。

12 テガミ

工藤君に告白した後、

私は快斗への想いを手紙へ綴った。

『宿題』として…

「寒い…」

ハアと手に息をふきかけ

インターホンをそっと押した。

ピンポーン

「志保、どうした？」

「工藤君…宿題ができたの。」

工藤君は笑顔で私を招きいれた。

「まあ、座れよ。」

工藤君は私を励ますために

色々な話をしてくれた。

「でさ、今日さ…で、くだったんだ！」

けど、私の頭の中は快斗でいっぱい

工藤君の話はほとんど耳に入らなかった…

「志保、お前聞いて無いだろ？」

「…ごめんなさい。」

「まあ良いや！で、宿題は？」

「これよ。」

私は工藤君に手紙を渡した。

「志保…」

「私はこれから薬を飲んで志保に戻る、

今まで本当にありがとう…工藤君。」

泣いたりしない。

工藤君の前でもう泣いたりしない。

決めたのは私。

後悔なんてしない。

「工藤君、その手紙…読み終わったら快斗に渡して欲しいの。お願いできるわね？」

「ああ…分かった。」

工藤君は私の手をそっと取り

優しく握ってくれた。

あまりにも温かくて涙が目に溜まる…

「志保、連絡しろよ？」

「ええ、ちゃんと引越しが終わったから連絡するから心配しないでちょうだい。」

「志保、今までありがとう。」

工藤君の手に力が入る。

「…じゃあ、行くわ。」

私から手を解き、工藤君の家を後にした。

一歩一歩力を入れて歩く。

落ち葉がサクサク音を立てる。

「博士、ただいま。」

「おかえり哀君、遅かったのお。」

ねえ、快斗。

快斗は私のことどう

思ってたのかしら？

「博士…薬飲んでくるわね。」

「哀君、薬は本当に大丈夫なんじゃな？」

「大丈夫よ博士、工藤君にあげた薬と同じだから。」

「哀君っ、今まで本当に…ありがとう。」

博士は泣きながら私をきつく抱きしめた。

痛いくらいきつくきつく抱きしめた。

「痛いわ…博士。」

「おお！…す、すまんのう。」

「じゃあね、博士。」

私は自分の部屋に行き、

ケースから薬を取り出した。

「さようなら…」

私は鏡を見つめ、小さく微笑み

薬を口に入れた。

・・*・*・*

「新一、話つてなんだ？」

灰原哀がいなくなつて一週間。

新一は快斗を家に呼んだ。

「これ、志保から…」

新一は哀の『宿題』と

志保からの手紙を快斗に渡した。

「哀からと志保から…まあ志保からののは
俺へ何だけどさ、まあ読んでみるよ。」

「志保…じゃあ、哀は？」

「哀から聞いて無いのか？哀はもう薬を飲んで元の姿に
戻ったんだ。宮野志保として生きていくことを決め…」

「何で言ってくれなかったんだよ…！」

快斗は新一の言葉を遮り

テーブルを強く叩き胸ぐらを掴んだ。

「し、志保がちゃんと快斗にも言っつて
言っただよ…とりあえず落ち着けよ。」

「…悪い、手紙ありがとう。読んで良いか？」

「ああ。」

快斗はゆっくり座り手紙の封をそつと開け

コーヒーを一口飲んで『宿題』に目を通した。

『快斗へ

突然こんな決断をしてごめんなさい。
けど、決めました。

私は宮野志保として、一人で新たな
スタートを切ります。

快斗は本当に私に優しくしてくれた。
ありがとう。 本当にありがとう。

もう、苦しまないでね。

快斗の幸せを心から願ってます。

快斗。

私、あなたのことが大好きよ。

いつも辛い時支えてくれて

ありがとう…

快斗は私の翼でした。

これからもあなたから貰った

たくさんの勇気や言葉を胸に

明るく生きていきます。

さようなら。

灰原哀』

12 テガミ(後書き)

ばたばたして全然書けなくて
本当にゴメンなさい><!

もう少し続きます(^ω^)

13 ホンネ

哀は俺を好きになってくれた。

けど、自分のせいで俺を苦しめてる
ってそんな風に思い込んで…結局
俺が哀をたくさん傷つけたんだ。

「新一、俺…」

「志保からの手紙も読んだらどうだ？」

「あ、ああ…」

志保から新一に宛てられた手紙には
薬剤師の資格を取るために勉強
しながらアルバイトをして
生活してることを書いていた。

「薬剤師…」

「あいつ、組織で毒薬作ってたからさ
今度は人の役に立つ薬を作ろうとでも
思ったんじゃないの？まあこれは俺の
憶測に過ぎないんだけどさ。志保は
志保なりに将来のこと考えて前向きに

頑張ってるみてーだぜ？なあ、快斗
お前はこんな志保のためにどうしたい？」

「哀を…助けたい。」

「じゃあ伝えに行けよ。もしかしたら
志保だって待ってるかもしれないし、
ここに住所書いてあるからさ、な？」

本当はずっと怖かった。
このまま哀と幸せになって
良いのか分からなくて、
けど、もう決めたんだ。
青子の分まで俺は幸せに
ならなきゃいけないし
これ以上大切な人を失いたくない。

「新一、ありがとう…また借りを
作っちゃったな。本当感謝してる。」

「なんだよ気持ち悪いな。」

「気持ち悪いってひでーよ新一！」

「嘘だよ、今のお前…すげえキラキラしてる。」

「キラキラ！？うつわー新一って蘭ちゃんだけじゃなく
俺みたいな男にもそうゆうこと言っただな！キザな奴！」

「キザだと！？あんな真つ白な服着て
怪盗やってたお前にだけは言われたくねえ！！」

怪盗。

哀に会ったあの時から

俺はもうキッドになってない。

「…そうだ！！新一、ありがとな！！」

お前キザだけど本当に良い奴！！じゃあな！！」

快斗は新一に二力つと歯を出し
とびっきりの笑顔を見せた。

・・*・*・*・*

「ふう…疲れた。」

難しい化学式が並ぶ本を必死に
読みながらコーヒーに手を伸ばす。

「あちっ…」

モノクロのお洒落な家具に
囲まれて一人で懸命に勉強する志保。

「ちょっと熱すぎたわね。」

一人暮らしを始めて一週間。
米花町の隣町のマンションを借り
以前、青子のためにかすみ草を
買ったお花屋さんでバイトをしながら
人の役に立つ仕事がしたいと思い
自分の知識や技術を活かせ、人を救う
手助けができる薬剤師になろうと
決めて必死に勉強していた。

コンコン

「何かしら…ベランダの方から
聞こえたわね。風かしら…？」

志保は部屋を出てすぐ
ベランダに向かった。
植木鉢が倒れていないだろうか
なんて心配をしながら。
おそるおそるカーテンを開けたら…

「か、快斗？」

窓の外には怪盗キッドの
コスチュームを身に纏った
黒羽快斗が立っていた。

手に赤い薔薇の花束を持って…

13 ホンネ（後書き）

いよいよ次回完結です！
なんか話がめっちゃくちゃ
ですが読んでくれて本当に
ありがとうございます^^*

14 ハジマリ

初めて快斗と出会った時の
記憶が鮮明に蘇った。

「どうしてそんな顔をしてるんです？」

「か…快斗。」

気づいたら私は泣いていた。
びっくりして、嬉しくて
鍵を開けてベランダに出た。

「ゴメン、新一から住所聞いて
勝手に飛んできちゃった…」

「快斗…手紙読んだの？」

「ああ、哀からのも志保からのも。」

「工藤君…両方見せたのね。」

どうせ見せるだろうと思っていた。
いつか快斗がここを尋ねてくるんじゃない

無いかとも思っていたがまさか空から飛んでくるとは思わなくて気づいたらクスクス笑ってしまっていた。

「何がおかしいんだよ」

「だって、初めて会った時と似てるから…思わず、ね。」

「まあそれも計算の内ですよ」

「あら、さすがね怪盗さん。」

快斗は私をジロジロ見回す。
そつえば宮野志保としての姿を
快斗は知らなかったんだっただ…

「予想以上に大人っぽくてびっくりした。
お前本当美人だな、モテてるだろ…？」

「あら、そんなに直接的に言うなんて
怪盗モードなのかしら？その割には
言葉遣いが快斗のままだけど…？」

快斗は頬を赤らめて
頭をくしゃくしゃとかき

『オホン』と軽く咳払いをし
真剣な顔をしてまた話出した。

「空を飛んで、此処^{ココ}から逃げてしまいたい。
ってお前、そう言ったよな？もちろん覚えてるだろ？」

「ええ。」

「これからはさ、逃げるためじゃなくて、
これから前向きに生きていくために
俺と二人で飛ばないか？…なーんて
新一みたいなこと言っちゃったな！
キザで気持ち悪いだろ俺、笑えよ。」

突然の言葉にびっくりして
声が漏れそうになった。
唾を飲み込み、深呼吸をする。
こんな時こそ落ち着かなきゃ…

「快斗、私…貴方をたくさん傷つけて
たくさん苦しめたのよ？それでも良いの？」

「俺の方こそお前をたくさん
傷つけて本当にゴメンな。」

「何で快斗が謝るの…」

「俺、もう大切な人失いたく無いんだ。
だから…もう俺の前から勝手にいなくな
るなよ…本当に辛かったんだからな！」

快斗は強く私を抱きしめてくれた。
その腕が少し震えていて、けど温かくて
もうこの人を傷つけないと思った。
この人を支えていきたいと強く思った。

「怪盗さん、今日は何しに来たのかしら？」

「…あ、これを渡しに来たんです。」

出会った時には一本の赤い薔薇。
けど、今回は綺麗な赤い薔薇の花束。

「あら、愛の告白かしら？」

「そうゆうことにしておいて下さい。」

出会った時と同じようなやり取り。
私は快斗と顔を見合わせて微笑む。

「貴女の名前は？」

そう言いながら快斗は私をお姫様だっこしてゆつくりと顔を近づける。

「宮野志保です、お見知りおき…」

言い終える前に私の唇は塞がれた。

「あら、怪盗さん。貴方は先に口付けをするのね。まずは私に言うことがあるんじゃないの？」

いきなりのキスにびっくりして私は意地悪く快斗にそう言った。

「あ…すいません、貴女の美しさに見とれてしまいつい口付けをしてしまいました。しかし、貴女は今幸せそうに微笑んでますよ？本当はかなり嬉しかったのでは無いですか？」

「…も、もう良いわ。言わなくて良いから。」

「いいえ、言わせて下さい。」

「え？」

「貴女が空を飛びたくなったら

私は貴女の翼になってさしあげます。

貴女が寂しくて辛くなったら

私は貴女を何度も抱きしめてあげます。

…私は貴女が好きですから。」

「ありがとう。」

貴方がそう言うのなら

私の翼になってもらいましょう。

二人で新たな道を進むために

前向きに生きていくために必要な

そんな翼になってもらいましょう。

翼。

14 ハジマリ（後書き）

やっと完結しましたー！

思いつきで書いてもう何年

経ったんでしょうか（＾ω＾）

出会った時のように

最後もキッドとして

終わらせましたー！

たった14話なのに

すごく疲れました；；

これから新連載に

切り替えて頑張ります♪

本当にありがとうございました

2011・03・04 奈津美

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3410f/>

翼

2011年7月7日22時05分発行